我がよき友マンフレッド
― マンフレッドから学んだこと

マンフレッド・ブルスト氏
Manfred Wurst

ドイツ、のシュトットガルトの丘から眺めると眼下にオレンジ色の屋根が拡がって見えていた。「こんなところに住めたら」と、つぶやいたら、こんな答えが戻って来た。「貧乏人が住む街ではない」これがニューヨークのシスカ・ヘネシーで共に働き、終生の友となった、マンフレッド・ブルストの言葉である。ドイツで有名な空調機のトップメーカーで父親の急逝により、帰国してマイスナー・ブルスト社の社長になっていた。シュトットガルトはベンツの本拠地で、他にボッシュ、フォルクスワーゲンの各社が製造の拠点としている裕福な市である。又、文化活動では指折りの評価が高く、オペラ、バレー、室内楽でヨーロッパに君臨している都市である。マイスナー・ブルスト社は文字通りブルスト家の名が刻まれた会社で、その社長室では、外気の状態が分かるように、温度、湿度、風速、気圧など関連のデーターが読めるようになっていた。いつも日本のことを気にかけて、お互いの国の復興を願っていた。ドイツからの経済視察団で訪日した折、トヨタ自動車の塗装工程を見学したいと願っていたが一般の見学路のみが許されて失望していた。「何か見せられないものがあるか、或いはスパイしているものがあるかな」と率直な感想を述べていた。京都の料亭で会席料理を共にした折には、全ての食事を完璧に平らげて接待の仲居さんを驚かせていた。西陣で高価な黒の絹の着物地を妹のパーティードレス用にと買ったがその時の真剣な表情とか、最高値の絞りのネクタイを買った時は、これは何回くらい洗えるかと訊いていたのがマンフレッドである。そして、ドイツではカードを使わず、現金で買い物するようにアドバイスして、アメリカとの考え方の違いを教えてくれた。PESの社員を同伴してブルスト社を訪れたのが、合計6度に及ぶが、工場見学ではコイル部、ファン部、フィルター部、エリミネータ部とに分割して製造され、自由な組み合わせに対応できる空調機や、農業用の穀類を空気搬送する超大型のファンを見学して驚かせられた。シュトットガルト郊外の学園都市ハイデルベルクへの案内では、マンフレッドのお気に入りのシラーの旧宅や、ハイデルベルク城や、シラー像の前で、撮影した写真が記念に残っている。

ワシントンホテル稲山副社長を同伴した時には、ベンツ工場内の博物館を案内して、昭和天皇御用達の同型の車が展示されているのを示して誇らしげに会話を弾ませた。雪の季節に訪れた時には、ベンツは雪に弱いのでと、4個の砂袋を用意していて、坂道で車を降りて、砂袋で重心を変えてスリップ対策にしていた。1979年には手紙で名古屋市役所の宮下蕉風さんを紹介しておいたので、特別の来客としてもてなしをしてくれた。ドイツでは鹿の肉を始めて食べたとの話から始まって、宮下さんからの帰国談を楽しんだ。以後、マンフレッドに会う度に、「蕉風はどうしているか」との会話から始まるドイツでの様子を、今度は、宮下さんに報告することで、3人の友情が深まっていった。マンフレッドの最後はパーキンソン病での苦闘の中でも、車椅子で介護の自家用運転手の助けを借りて移動し、名所や、食事所を案内してくれた。

5レーンのアウトバーンの左端を時速200キロオーバーのスピードで走るスポーツカータイプのベンツの前席に座り、スピードメーターの針の写真を撮っていたことが、懐かしい。

その時、車中にはモーツアルトの「レクエム」が流れていた。又シュトットガルトからフランクフルトへの飛行機移動に間に合わなかった時には、マンフレッドの運転でアウトバーンを走行して事なきを得た。眞にドイツは車の国だと実感させられた。